

長野県植物研究会 2016 年度大会及び 212 回例会の報告

大塚 孝一*

2016 年度大会及び例会が、6 月 11 日～12 日の二日間で下記の日程、内容で行われました。今回は、来年度が 50 周年記念大会になるので、その予行的な形態での大会として、信大をお借りして井田編集委員長にお世話になりました。大会参加者は 39 名、例会参加者は 30 名でした。担当幹事：大塚孝一。

1 日時 平成 28 年 6 月 11 日(土)午後～12 日(日)

2 場所 6 月 11 日(土)：

長野市 信州大学教育学部 N101

6 月 12 日(日)：

長野市七二会 陣場平山付近

平成 28 年 6 月 11 日(土)

平成 28 年度大会

12:00～ 受付

12:00～12:40 植物同定会

12:40～13:20 総会

13:30～14:50 特別講演

大原隆明氏(富山県中央植物園主任)：

「日本のサクラ・長野県のサクラ」

休憩

15:00～16:40 一般講演(1 題 20 分)

1 藤田淳一(松本市)：

大型シシウド属をめぐる分類学的問題

2 松浦亮介・佐藤利幸(信大理学部)：

山梨県周辺におけるシダ種構成の変遷—植生分布パターンの過去と現在

3 山浦攻・井田秀行(信大教育学部)：

多雪地ブナ林のフェノロジー

4 中山 洸(佐久市)：信州の植物 スライド解説(9)

懇親会 長野市権堂 やま茶屋

平成 28 年 6 月 12 日(日)

第 212 回例会 9:00～14:00 頃まで

場所：陣馬平山付近

大会開始前の植物標本同定会に続き、中山洸会長のあいさつの後総会にはいり、事務局の佐藤庶務幹

事、島野会計幹事から事業報告、会計報告がなされました(写真 1)。次期 2017 年度からの新会長には佐藤利幸庶務幹事、庶務幹事に島野光司会計幹事、会計幹事に井田秀行幹事が、幹事として新たに尾関雅章氏が加わることが決定しました。また、総会の議が必要となりますが、中村会長が退任して名誉会長となることが予定されています。

特別講演では、富山県中央植物園の大原隆明氏が「日本のサクラ・長野県のサクラ」と題して、サクラ属のうちサクラ亜属の種類についてお話いただきました。一般講演では 3 題の発表と、中山会長のスライド上映がありました。発表要旨の入手を希望される方は、大塚までご連絡ください。

大原隆明先生は、まず、世界のサクラ亜属は約 60 種あり、分布の中心はヒマラヤ以西の東アジアで、ヨーロッパに 3 種、北アメリカに 7 種が分布する以外は東アジアにあるとされました(写真 2)。続いて長野県に分布するサクラについて、野生分類



写真 1 大会の様子



写真 2 特別講演 大原隆明先生

群の特徴や識別のポイント、代表的な栽培品種なども紹介してくださいました。長野県内に分布する野生のサクラの分類群数は日本屈指で、9種12分類群（変種以上）とされました。特にマメザクラとキンキマメザクラの違いや分布、チョウジザクラとオクチョウジザクラの違いや分布など詳しく話されました。会員の方々には、区別が難しかったり、どこに分布するかなど従来の認識とは違った見方もできて、大変勉強になったと感じました。（別記要旨参照）

藤田淳一氏は、識別が難しい上、各地域での認識や図鑑の位置付けに違いがみられるシシウド属について、長野県北部でシシウドとされてきた植物がミチノクヨロイグサであったことや、その分布について、またミチノクヨロイグサが、夏咲き低山型、秋咲き低山型、夏咲き亜高山型の3型が存在することが判明したと発表されました（写真3）。

松浦亮介氏は、地球温暖化などの環境変動が生物の活動に直接的・間接的に大きな影響を及ぼすことから、シダ植物は水平分布の移行域の把握や環境変動の観察指標として最も適した種群であるとし、冷温帯～暖温帯の移行域である山梨県周辺でシダ植物の分布調査を行い、過去データとの分布パタンの比較を行い、山梨県周辺における植生区分域とその推移の観察、各植生区分の表徴種の決定、得られた表徴種の全国分布パタンの観察を行ったことなどを発表されました（写真4）。

山浦攻氏は、ブナ林の表情は、特に日本海側の多雪地ブナ林では、積雪量の変動により、年ごとにその表情は大きく変化する。雪の量が極端に少ないと、例年5月中旬まで雪に埋まっている下層植生がいつもより早く展葉しはじめ、例年だと高木よりもおよそ1ヶ月遅れて展葉を開始するが、雪が少なく消雪のタイミングが早まると、展葉開始も早まると考えられること、そして、よく観察すると消雪のタイミングに対するこうした挙動は植物種ごとに異なっている可能性もあることから、消雪と関連した葉群フェノロジーの観測を行ったことなどを発表されました（写真5）。

中山洸会長からは、「信州の植物スライド解説9」として、恒例になった植物解説をしていただきました（写真6）。紹介された植物は、ツチアケビ、カルイザワテンナンショウ、コウヤイタドリ、ヒトツバイチャクソウ、フジ左巻き、クロベ、コヒルガオ、クマザサ、ジュウニヒトエ、クルマアザミ、ホソバツルリンドウ、サルオガセ、コブシ、オオミゾソバ、カジノキ、アズマネザサ、キダチコマツナ



写真3 一般講演 藤田淳一氏



写真4 一般講演 松浦亮介氏



写真5 一般講演 山浦攻氏

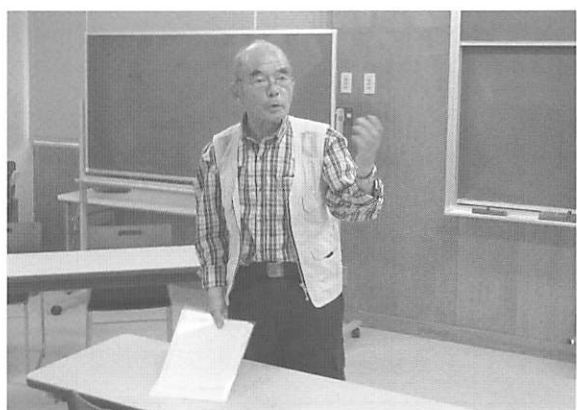


写真6 一般講演 中山洸氏

ギ、オオアカウキクサ、ホザキヤドリギ、タチゲヒカゲミズ、アケボノソウ、ツルコケモモ、クリ、オオアカバナ、ヤマゴボウ、ホソバヒルムシロ、アサザ、エンビセンノウ、アサマフウロ、クグスゲ、トリカブト Sp (ハコネ)、ムラサキエンレイソウ、アカヤシオ、レンゲツツジ、エゾアジサイ、コマツカサススキ、ソクズ、ノダイオウ、ツルキケマン、サワグルミ一斉林、カラスウリ類、ジュウガツザクラ、ヤマグルマの枝、ミスミソウ類、ケルン。

(大会参加者) 大原隆明、中山 洸、大塚孝一、佐藤利行、松浦亮介、島野光司、井田秀行、山浦 攻、千葉悟志、中西由美子、野林朝香、川上美保子、佐々木あや子、小口好久、藤田淳一、石田祐子、東 浩司、三樹和博、笠原光枝、垣内雄治、垣内美佐子、坂口竣弥、早坂祥彦、吉沢敏江、泉 砂智、石井高子、井浦和子、市川伸人、市川美智子、上野勝典、上野由貴枝、横内文人、草間 勉、林 一六、多田景子、

長谷川慎平、日台雄斗、松田貴子、尾関雅章 (39 名)

懇親会は、長野市内のやま茶屋において 14 名の参加で行いました。

翌日は長野市七二会の陣馬平山周辺で林道沿いを歩きながら観察を行いました。まず、地藏峠駐車場に集合し、当日参加者を加え集合写真を撮影しました (写真 7)。例会の詳細は、別途藤田さんの「例会報告その 2」を参照してください。

(第 212 回例会参加者) 中山 洸、大塚孝一、佐藤利行、松浦亮介、島野光司、千葉悟志、中西由美子、野林朝香、川上美保子、佐々木あや子、小口好久、藤田淳一、石田祐子、東 浩司、三樹和博、笠原光枝、垣内雄治、垣内美佐子、坂口竣弥、早坂祥彦、吉沢敏江、泉 砂智、石井高子、井浦和子、市川伸人、市川美智子、角田素野香、中村千賀、小林正明、井出 靖 (30 名)。



写真 7 集合写真

長野県植物研究会 2016 年度大会 特別講演要旨

日本のサクラ・長野県のサクラ

大原隆明 (富山県中央植物園)

「サクラ」はバラ科サクラ属 *Prunus* に含まれる樹木の一群を指す言葉である。この語は広義にはウワミズザクラ亜属 Subgen. *Padus* に含まれるウワミズザクラ *P. grayana* やシウリザクラ *P. ssiori* などを含める場合があるが、通常はサクラ亜属 Subgen. *Cerasus* に属する樹木の総称として使用される場合が多いため、今回の講演でもこのサクラ亜属を指す語として使用する。

サクラ亜属は北半球の温帯から亜熱帯地域に約 60 種が知られている。その分布の中心はヒマラヤ

以西の東アジア地域であり、ヨーロッパに 3 種、北アメリカに 2 種が分布する以外はこの地域に分布している。なお、かつてはユスラウメ *P. tomentosa* やニワウメ *P. japonica* などが含まれるユスラウメ亜属 Subgen. *Lithocerasus* もサクラ亜属内の一節 Sect. *Microcerasus* として分類されていたが、最近の DNA による系統解析からこれらは別の亜属として取り扱うのが妥当と考えられている。日本に産するサクラ亜属の分類群数は研究者により異なっている。演者は現在までに有効に記載されたものとしては、13 種 19 分類群として取り扱うのが妥当と考えている。

さらにサクラは古来より日本人に親しまれ、鑑賞の対象とされてきたため、自生品からの選抜や交雑によって育成された多くの栽培品種が知られている。これらの分類学的整理は途上の状態であり、ど

のくらの品種があるかは未だ不明であるが、少なくとも見積もってもその数は 500 以上におよぶと考えられる。

今回の講演では、長野県でみられるサクラの野生分類群の特徴や識別のポイントを述べた上で、長野県で一般的にみられる代表的な栽培品種や、長野県発祥の栽培品種についても紹介する。

1. 長野県でみられる野生分類群

長野県は日本の中央に位置することに加え、標高差も大きく、多様な環境がみられる。県の北部は日本海型、中部は内陸型、南部は太平洋型気候区に分類されるなど、気候も変化に富んでいる。これを反映して、長野県内に分布するサクラの分類群数は日本屈指であり、9 種 12 分類群 (変種以上) におよぶ。その内訳は以下のとおりである。

① ヤマザクラ *P. jamasakura* Sieb. old et Zucc.

花部は、細く直線的な輪郭の萼筒、縁が内曲し先端の鋸歯が細く伸びる苞、白色の花弁などが特徴。葉は裏面が白色を帯び、縁の鋸歯は微細で斜上するなどの特徴がある。長野県内では南部の比較的標高が低い地域に分布する。

② オオヤマザクラ *P. sargentii* Rehder

花部は、細く直線的な輪郭の萼筒、縁が内曲せず先端の鋸歯が太い棍棒状になる苞、紅色を強く帯びた花弁などが特徴。葉は裏面が白色を帯びる点ではヤマザクラと共通するが、縁の鋸歯は粗く三角状で開出するなどの特徴がある。長野県内では全域に分布するが、やや標高が高い地域に多い。次のカスミザクラとは分布域が接する場所も多く、アカツキザクラとよばれる交雑品も比較的良好にみられる。

③ カスミザクラ *P. leveilleana* Koehne

花部は、やや丸みのある輪郭の萼筒、先端の鋸歯は先が伸びず三角形となる苞、短毛が多い小花柄などが特徴。葉は縁の鋸歯は粗く三角状で開出する点ではオオヤマザクラと共通するが、裏面が白色を帯びず光沢があるなどの独自の特徴がある。長野県内では全域に分布し、もっとも普遍的にみられる野生種。なお、塩尻市片丘で見出されたカタオカザクラは本種の幼形開花型として扱われているが、純粋なカスミザクラの一型ではない可能性も考えられる。

④ オオシマザクラ *P. speciosa* (Koidz.) Nakai

花部は、鋸歯が目立つ大型の萼片、先端の鋸歯が分岐して細く伸びる苞などが特徴。葉は質が厚く、縁の鋸歯の先端が著しく伸びて芒状になるなどの独自の特徴がある。長野県内には本来の自生はないが、

ソメイヨシノやサトザクラの台木として使われているため、これが逸出したと考えられるものが時にみられる。

⑤ エドヒガン *P. spachiana* (Lavallee ex E. Otto) Kitam.

花部は、壺形で開出毛の多い萼筒、細鋸歯の多い萼片、小型で細く早落性の苞などが特徴。葉は側脈が密で裏面に伏毛が多く、縁の鋸歯は先端がやや鈍く微細であるなどの特徴がある。長野県内では南部の河岸段丘面などにみられる。長野県植物誌(1997)では県中北部のものは植栽品と考えられるとの記述があるが、旧中条村などでみられる集団は形態や樹齢の変異が多く、自生品ではないかと思われる。

⑥ タカネザクラ *P. nipponica* Matsum.

花部は、太く釣鐘形の萼筒、先端の鋸歯がやや分岐して腺に終わる苞などが特徴。葉は、縁に鋭い欠刻状の重鋸歯がありその先端が球状の腺に終わるなどの特徴がある。また、さく葉標本を作製すると新聞紙が黄色く染まるのも特徴的。長野県内では県内全域の亜高山帯から高山帯下部にみられる。萼筒などに毛が多いものをチシマザクラ、葉柄や小花柄が有毛なものをケタカネザクラとして独立分類群と扱う見解もあるが、変異は連続しておりタカネザクラの一型にすぎないと思われる。また南アルプスの高所のものは小型でクモイザクラとして独立分類群と扱う見解もあるが、今後の詳細な検討が必要である。

⑦ マメザクラ (広義) *P. incisa* Thunb.

花部は、扇形から広卵形で先端が鈍い鋸歯がある苞などが特徴。葉の縁に欠刻状の重鋸歯がありタカネザクラに似るが、その先端が球状の腺にはならないなどの特徴がある。基準変種のマメザクラ var. *incisa* のほか、キンキマメザクラ var. *kinkiensis* (Koidz.) Ohwi およびブコウマメザクラ var. *bukosanensis* (Honda) H. Hara があり、長野県内にはマメザクラ、キンキマメザクラが分布する。マメザクラは八ヶ岳周辺地域に分布しており、萼筒は 7mm 以下と短く、葉も小型。キンキマメザクラは天竜川沿いの岩地や王滝村に分布し、萼筒は細長く長さ 8mm 以上、葉は長さ 4cm 以上と大型。なお、キンキマメザクラのうち王滝村に産するものは小泉秀雄が独立種オンタケマメザクラとして扱っている。これは 1984 年の長野県西部地震によって絶滅したといわれていたが、実際には現存しており、今後の分類学的な検討が必要である。

⑧ チョウジザクラ (広義) *P. apetalata* (Siebold et Zucc.) Franch et Sav.

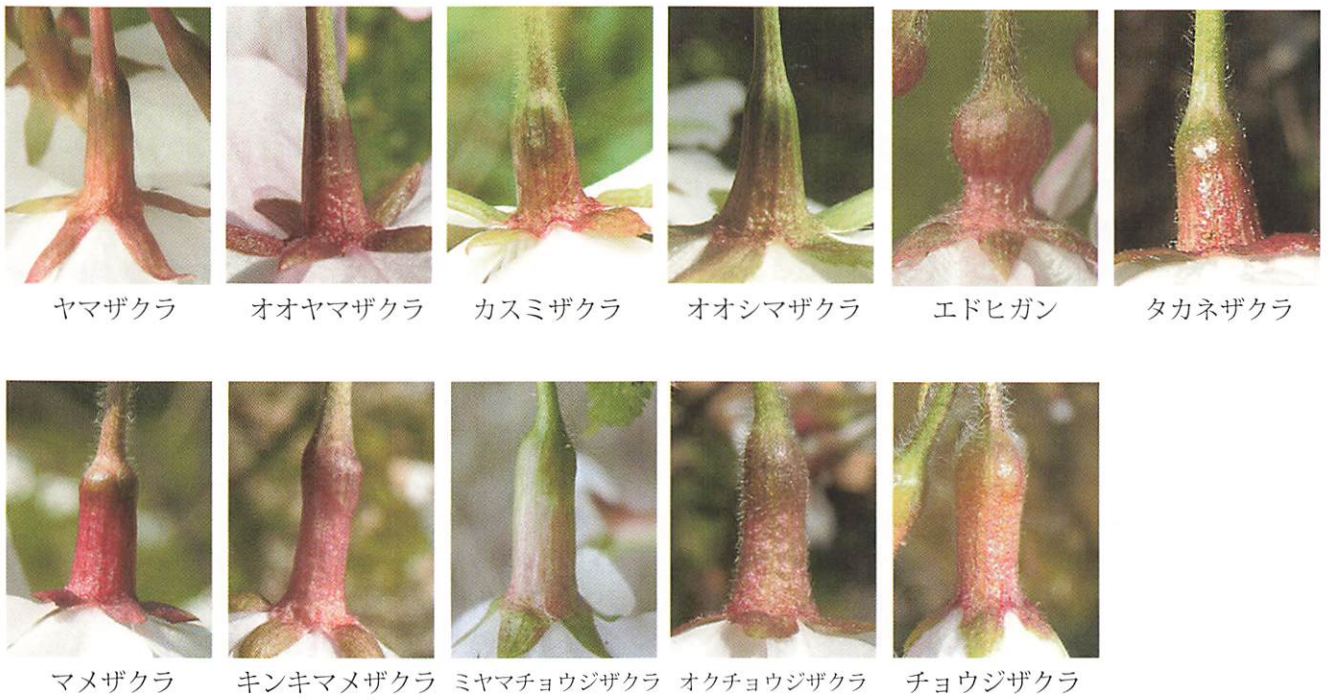


Fig.1 長野県で見られるサクラ野生種の萼筒

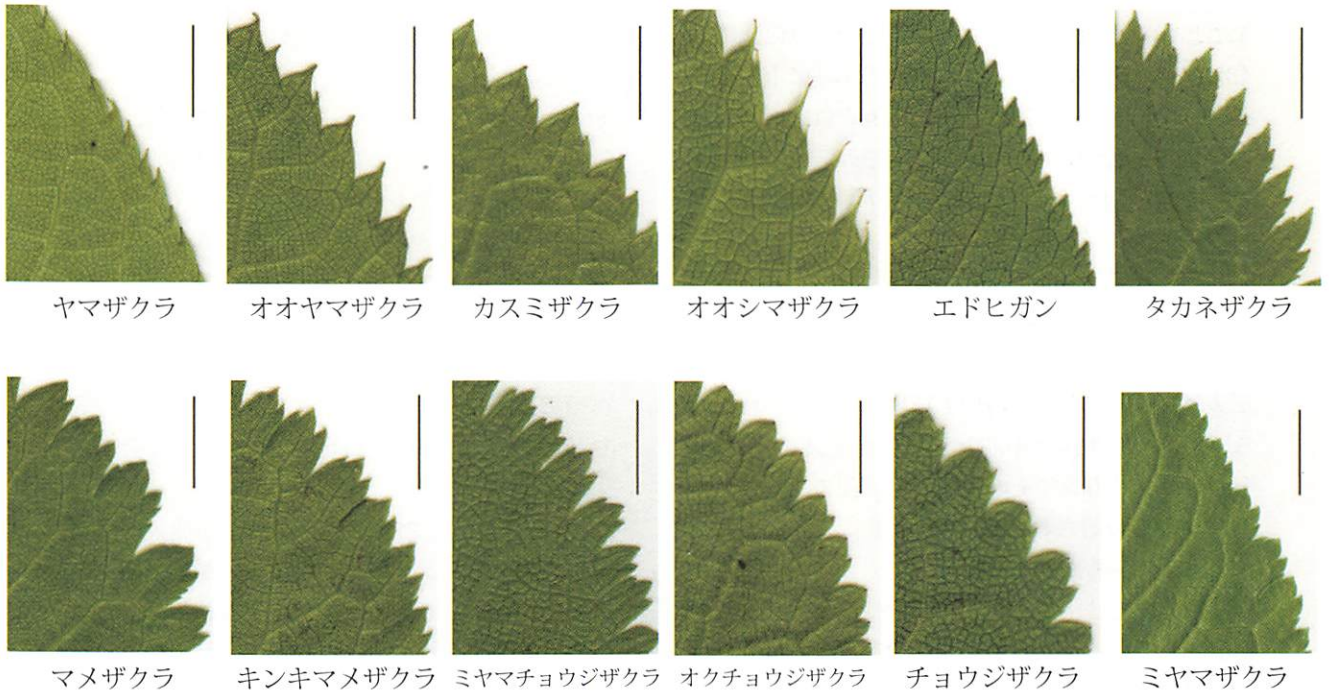


Fig.2 長野県で見られるサクラ野生種の葉縁の鋸歯 (スケールは 1 cm)

花部は、太くて長い筒形の萼筒、長い開出毛がある小花柄、菱形から広楔形で先端が著しい腺となる鋸歯がある苞などが特徴。葉は、先端が腺に終わる欠刻状の重鋸歯があり、長毛が多いなどの特徴がある。基準変種のミヤマチョウジザクラ var. *apetala* のほか、オクチョウジザクラ var. *pilosa* (Koidz.) E. H. Wilson およびチョウジザクラ (狭義) var. *tetsuyae* (H. Ohba) Oohara があり、長野県内にはこれらすべてが分布する。ミヤマチョウジザクラは御嶽山周辺の本曾地域に分布しており、萼筒は開口部がもっとも幅広くて毛が少なく、葉の鋸歯は数が多く鋭く尖る特徴がある。オクチョウジザクラは長野盆地より北の多雪地域に分布し、萼筒はミヤマチョウジザクラと同じく開口部がもっとも幅広いが、葉の鋸歯は数が少なく先が鈍頭である。チョウジザクラ (狭義) は前 2 変種の分布域以外の地域に生育し、葉はオクチョウジザクラと酷似するが、萼筒は基部でもっとも幅が広く壺形を帯びることで容易に識別できる。

⑨ミヤマザクラ *P. maximowiczii* Rupr.

花序は明らかな総状花序となり、萼筒は浅い釣鐘状壺形、苞は全体が緑色で卵形～円形であるなど、日本産の他のサクラ亜属とはかなり異なった特徴がある。一方で、葉は緑に明瞭な欠刻状重鋸歯がありマメザクラとよく似ており、標本が誤同定されていることも多いが、葉先がマメザクラのように急に細くなって尾状になることはなく、当年枝に上向きの硬い短毛が密生することなどを確認すれば同定は難しくない。長野県では各所の深山でみられる。開花期も 5 月中旬から 6 月中旬と他のサクラ類より遅い。

2. 長野県で栽培されるサクラ

長野県でもっとも一般的に栽培されるのはやはりソメイヨシノであり、各地で花見の対象とされている。また、飯田市を中心とした南信地域をはじめ、全県でエドヒガンやその枝垂れ性品種であるイトザクラが多く栽培され、「高山五大桜」など観光の対象となっているものもある。

高標高地では、オオヤマザクラやカスミザクラが植樹されている場所もよくみかける。また、サトザクラの栽培品種についても他地域と同様に、「カンザン」や「イチヨウ」などがよく栽培されている。

観賞用以外にも、果実を食用とするセイヨウミザ

クラ *P. avium* L. が冷涼で乾燥した気候を活かして広く栽培されているが、最近是小布施町などで加工用のスミノミザクラ *P. cerasus* L. も栽培されるようになってきた。

このほかにも、長野県内には以下のような独自のサクラの栽培品種がみられる。

①「タカトオコヒガン」(高遠小彼岸)

伊那市の高遠城に伝わったコシノヒガン (エドヒガン×キンキマメザクラ) の栽培品種で、他の栽培系統よりも色が濃く観賞価値が高いもの。「天下第一の桜」として全国的に有名。

②「コモロヤエベニシダレ」(小諸八重紅枝垂)

小諸市の懐古園で、昭和 40 年代に公益財団法人日本花の会の初代農場長志村長蔵氏が発見。ヤエベニシダレのうちの一系統で花色が濃いもの。

③「オミノサトブタイザクラ」(麻績の里舞台桜)

飯田市旧座光寺麻績学校に樹齢 300 年以上と推定される原木があるエドヒガンの栽培品種。枝垂れ性で、八重咲きの花と一重咲きの花が混在する特徴がある。2007 年に公益財団法人日本花の会の田中秀明氏らにより発表された。命名は公募による。

④「ショウエイジ」(正永寺)

飯田市の正永寺の境内であった場所で、森田和子氏によって発見され、佐野藤右衛門が命名、1973 年に大井次三郎によって正式に記載された品種。花弁数は 70 枚に及ぶ八重咲きで「タイザンフクン」に似る。

⑤「サトハラ」(里原)

森田和子氏により、1980 年に下伊那郡喬木村里原で発見されたサトザクラの一品種。花弁数は 15 枚前後の八重咲きで、直径 5cm におよぶ大輪。日本では栽培が絶えた「ホクサイ」とよく似ており、今後の検討が必要。

⑥「ソノサトキザクラ」(園里黄桜)

須坂市豊丘に植栽された「フゲンゾウ」の枝変わりとして羽生田郁雄氏が発見し、日本花の会の田中秀明氏が

2010 年に発表したサトザクラの一品種。淡黄緑色で緑色の筋が入る特異な色彩の花弁が特徴的。

⑦「ソノサトリョクリュウ」(園里緑龍)

上述品種を増殖する過程で発生した枝変わりを羽生田郁雄氏が発見したもの。花弁の緑色部分がさらに増え、花がやや小輪であるのが特徴。